

# 第1回高校生イタリア 派遣事業報告書

公益財団法人

中山芳彦香川イタリア交流財団

## 目的

香川県及びイタリア間の国際交流、文化芸術、農業分野の発展に寄与し、また国際社会に貢献できる人材の育成を通じて両国相互理解の促進に資することとする。

イタリア・パルマ市にあるバリラ社にご協力いただき工場見学や食文化のレクチャーを受ける。ミラノやフィレンツェにおいては現地の芸術や音楽に触れグローバルな視点や考え方を養う。



パルマ→フィレンツェ→ミラノ



## 今回の派遣事業に随行頂く

香川アンバサダー「山田吟子様」のご紹介

### 【ご経歴】

香川県高松市出身。愛知県立芸術大学声楽科卒業後、1983年にイタリア・フィレンツェのケルビーニ音楽院へ留学。1986年より、フィレンツェ国立歌劇場の専属団員として活動。

2020年までに多くの演奏ツアーに参加し、世界各地で活躍。音楽教育やアマチュアコーラスの指導にも携わり、2004年からは香川アンバサダーとして活躍。



# 令和7年度高校生イタリア派遣事業 スケジュール

	DATE	CITY	TIME	TRANS	SCHEDULE	MEAL
①	7/24 (木)	高松駅 発 関西国際空港 着 関西国際空港 発 香港国際空港 着	13:00 16:30 19:35 22:40	貸切バス  CX569	出国手続き後、キャセイパシフィック航空にて香港へ *空路 約4時間30分 ～乗り継ぎ～  【機内泊】	夕:機内
②	7/25 (金)	香港国際空港 発 ミラノ・マルペンサ空港 着  バルマ	00:50 07:55  昼 午後	CX233  専用車	*空路 約13時間50分 入国手続き後、現地ガイドと合流。専用車にてバルマへ *陸路 約2時間 ・市内レストランにて昼食 昼食後、【視察】バリラ（バスタ）工場（予定） ・ホテル内レストランにて夕食  【バルマ泊】	朝:機内 昼:◎ 夕:◎
③	7/26 (土)	  バルマ	  午前 昼 午後	  専用車	ホテルにて朝食をお召し上がり下さい 【視察】生ハム工場（予定） ・市内レストランにて昼食 昼食後、【バルマ市内観光】 ・バルマ大聖堂・ピロツカ宮殿・ガリバルディ広場 ・市内レストランにて夕食  【バルマ泊】	朝:◎ 昼:◎ 夕:◎
④	7/27 (日)	バルマ  フィレンツェ	  午前  昼 午後	  専用車	ホテルにて朝食をお召し上がり下さい フィレンツェへ移動（約2時間30分） 【終日フィレンツェ市内観光】 ・フィレンツェオペラ劇場見学 ・ウフィツィ美術館（イタリアNo.1・世界最古の美術館） ・市内レストランにて昼食 ・サンタマリアデルフィオーレ大聖堂（フィレンツェのシンボル） ・ボンテヴェッキオ（フィレンツェで最も歴史ある世界遺産） ・シニョーリア広場散策 ・グラッシナ公民館ガーデンにて夕食  【フィレンツェ泊】	朝:◎ 昼:◎ 夕:◎
⑤	7/28 (月)	フィレンツェ   ミラノ	  午前 昼 午後	  専用車	ホテルにて朝食をお召し上がり下さい 【トスカナ地方視察】 ・オリーブ園（イタリアを代表するオリーブオイルの名産地） ・トレヴィジオ城ワイナリー見学 ・トレヴィジオノ城内庭園にて昼食 【フィレンツェ市内】 ・ミケランジェロ広場（世界遺産・歴史地区にある広場） ミラノへ移動（約4時間） ・ミラノ到着後、市内レストランにて夕食  【ミラノ泊】	朝:◎ 昼:◎ 夕:◎
⑥	7/29 (火)	ミラノ	午前  昼 午後	専用車	ホテルにて朝食をお召し上がり下さい 【ミラノ市内観光】 ・ミラノ大聖堂（世界最大級のゴシック建築）・オペラ座 ・ガリレア（19世紀につくられた世界で最も歴史あるアーケード） ・イーターリー ミラノ ズメラルド自由散策&昼食 （イタリア中の美食が集まるフードマーケット） ・ミラノ市内にて街並み散策・買物などのフリータイム ・市内レストランにて夕食  【ミラノ泊】	朝:◎ 昼:- 夕:◎
⑦	7/30 (水)	ミラノ ミラノ・マルペンサ空港発	朝 12:45	専用車 CX234	ホテルにて朝食をお召し上がり下さい 空港へご案内 出国手続き後、キャセイパシフィック航空にて香港へ *空路 約11時間40分	朝:◎ 昼:機内 夕:機内
⑧	7/31 (木)	香港国際空港 着 香港国際空港 発 関西国際空港 着 関西国際空港 発 高松駅	06:25 08:10 13:00 14:00 17:30	CX596  貸切バス	～乗り継ぎ～ *空路約3時間30分  貸切バスにて高松駅へ。 到着後解散。お疲れ様でした♪	朝:機内 昼:- 夕:-

□上記日程は【2025年4月7日】を基準に作成。\*天候・交通機関の都合により発着時間などに変更が発生する場合があります。

□宿泊予定ホテル：【バルマ】 スター ホテル ドゥ バルク クラス 【フィレンツェ】 ニル ホテル

【ミラノ】 ダブルツリー バイ ヒルトン ミラン クラス

□利用航空会社：CX キャセイパシフィック航空

## 令和7年度高校生イタリア派遣事業 団員名簿

区 分	氏 名	所属・学校名
団 長	こにし たつき 小西 竜生	株式会社マルナカホールディングス 取締役総務部部长
団 員	ふじと まかな 藤戸 万叶	香川県立小豆島中央高等学校 普通科1年
団 員	ふかや せいら 深谷 星空	香川県立三本松高等学校 普通科3年
団 員	ゆきうえ しょうへい 雪上 翔平	香川県立高松高等学校 普通科1年
団 員	あかいわ みき 赤岩 未希	香川県立高松工芸高等学校 工芸科3年
団 員	しみず こうた 清水 皓大	香川県立高松工芸高等学校 美術家3年
団 員	たけうち あやの 竹内 彩乃	香川県立高松商業高等学校 商業科2年
団 員	おかだ りりこ 岡田 りりこ	香川県立高松東高等学校 普通科3年
団 員	まつもと あんな 松本 晏奈	香川県立高松南高等学校 普通科2年
団 員	やました かのか 山下 花音	香川県立高松西高等学校 普通科1年
団 員	やまもと みう 山本 美羽	香川県立高松北高等学校 普通科1年
団 員	ばんどう いつき 坂東 樹季	香川県立香川中央高等学校 普通科3年
団 員	くにみね ゆい 国峰 由依	香川県立高松桜井高等学校 普通科1年
団 員	やまじ えな 山地 詠菜	香川県立坂出高等学校 普通科3年
団 員	しのはら ゆな 篠原 結菜	香川県立善通寺第一高等学校 普通科2年
団 員	ともやす かいしゅう 友保 海舟	高松市立高松第一高等学校 音楽科2年
団 員	すみよし りの 住吉 璃音	高松市立高松第一高等学校 音楽科3年
団 員	ののむら あさみ 野々村 麻未	英明高等学校 普通科2年
団 員	もり みつき 森 光希	大手前高松高等学校 普通科3年
団 員	のりかね ゆうき 法兼 佑樹	香川誠陵高等学校 普通科3年
団 員	こんどう かな 近藤 佳那	大手前丸亀高等学校 普通科1年



## イタリアでの文化・芸術・食を通じた国際交流

このたび、公益財団法人中山芳彦香川イタリア交流財団の主催により、香川県内の高校生20名を対象としたイタリア派遣事業を実施した。期間は約1週間で、パルマ、フィレンツェ、ミラノの3都市を訪問した。事業の目的は、香川県およびイタリア間の国際交流、文化芸術、農業分野の発展に寄与し、国際社会に貢献できる人材の育成を通じて、両国の相互理解を促進することである。

初めに訪れたパルマでは、食品メーカーであるバリラ社を訪問し、工場見学や「食」に関するレクチャーを受けた。さらに、ハム工場での見学や生ハムの試食などを通じて、イタリアの食文化の奥深さと品質管理へのこだわりを学ぶことができた。

続いて訪れたフィレンツェでは、ウフィツィ美術館やサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂を見学し、ルネサンス期の芸術や建築の素晴らしさを体感した。さらに、トスカナ地方ではワイナリー見学やトレビオ城を訪問し、同行いただいた香川アンバサダーの山田吟子氏に民謡を披露していただいた。音楽イベントが少ない中で貴重な文化交流の機会となり、参加者にとって印象深い体験となった。また、山田氏のご提案によりグラッシナ公民館で現地の方々との交流が実現し、互いの文化理解をさらに深めることができた。

最終訪問地であるミラノでは、ミラノ大聖堂やガレリアを訪れ、歴史的建造物の壮大さや都市の文化的な活気に触れた。食文化を体験する場としてイタリーでの食事も行い、学生たちは現地の味や雰囲気を楽しんだ。自由時間も設けられ、自らの判断で買い物や散策を行うなど、海外での自立的な行動力を培う良い機会となった。

今回の派遣を通じて、参加した高校生たちはイタリアの歴史、文化、芸術に直接触れ、国際的な視野を広げる貴重な経験を得ることができた。現地の方々との交流や、文化・食を通じた体験により、国際理解の重要性と地域間交流の可能性を実感する場にもなった。一方で、現地での行動において一部にマナーや規律の面で課題が見られた。大聖堂など公共の場での振る舞い、撮影時の配慮、ホテルでの時間遵守、移動時の整列など、団体としての意識が十分でない場面があった。今後は、参加者一人ひとりが国際交流にふさわしい態度と責任を持ち、より円滑で品位ある行動ができるよう指導と連携を徹底していきたい。

引率者として同行する中で、学生たちが異文化の中で積極的に学び、交流を楽しむ姿に多くの成長を感じた。限られた日程ではあったが、食・芸術・歴史など多様な側面からイタリアを学ぶことができ、今後の派遣事業のさらなる発展に向けて大きな糧となる貴重な経験であった。

自分を変える旅 ～イタリア研修で見つけた私の原点～

この夏、香川県から集まった高校生20人とともに、5泊8日のイタリア研修に参加しました。

将来「看護師」として、多様な文化や価値観を持つ患者さんに寄り添える人になりたい。

そのために異国の文化に飛び込み、相手を理解しようとする経験をしてみたいと考え、この研修を志望しました。

出発前は「友達はあるかな」「現地の人と話せるかな」「自分らしさを出せるかな」という不安もありましたが、

それ以上に“自分を変える”という思いがあり、大きな好奇心を持って飛行機に乗り込みました。

現地でまず心を動かされたのは「ホスピタリティの精神」です。レストランのスタッフさんは、私たちが言葉に詰まっても、笑顔でゆっくりと待ってくれて、最後まで寄り添いながら話を聞いてくれました。また街中ですれ違う人たちからも気軽に挨拶をされることがあり、その表情も明るく気持ちがよく、異国の中でも人との距離がぐっと縮まる温かさを感じました。「相手を安心させるのは、完璧な言葉よりも、心からの態度」——これは看護の現場にも通じる大きな気づきでした。

自由時間には、あえて地図を持たずに街を歩きました。最初は迷うことが怖かったけれど、迷子になるたびに新しい景色や出会いがあり、現地の人が道を教えてくれたり、笑顔で声をかけてくれたりしました。そこで学んだのは、「迷うことは、成長の近道」だということ。安全な道ばかりを選んでいては、見られない景色があると知りました。

日を重ねるうちに、簡単なイタリア語の挨拶や感謝の言葉が自然に口から出るようになり、自分の殻を一つ破れたと感じました。言葉の壁を越えて心を通わせる喜びは、何にも代えがたいものでした。

この旅で得たのは、単なる観光の思い出ではありません。「ホスピタリティの大切さ」「迷う勇氣」「殻を破る挑戦」——これらは、将来看護師として患者さんと向き合うとき、きっと私の支えになるはずです。

今回の経験を胸に、私はこう心に刻みました。

「人の心に寄り添うには、まず自分が心を開くこと」

その“心を開く”ということは、簡単なようでいて、とても勇氣のいる行為だと思います。

勇氣を出して一步を踏み出せば、言葉が通じなくても、文化が違ってても、人は必ず応えてくれる——その確信を、この旅が与えてくれました。

いつか看護師になれた時は、患者さん一人ひとりの物語や背景に耳を傾けられる人でありたいと思います。

もしこれからの人生で迷い、立ち止まりそうになったときも、このイタリアでの小さな勇氣と温かな出会いを思い出すことで、前に進んでいく「大切なチカラ」になると信じています。

そして、この旅で出会った、さまざまな夢を抱く20人の仲間たちとの時間は、私の視野を広げ、大きな刺激となりました。互いの存在が励みとなり、このつながりはこれからも続いていくと思います。

イタリアで見てきた美しい景色、心を満たしてくれる美味しい食事、心が震えるほど壮大な芸術、そして優しく差し出された笑顔——

小さな島で生きてきた私にとって、この旅は「世界の広さ」と「自分の可能性」を同時に見ることのできた、

かけがえのない8日間でした。

2025年、15歳の夏、このような貴重な機会を与えてくださった財団の方々や、現地で温かく案内してくださった方々には心から感謝しています。本当に、本当にありがとうございました。

イタリア研修レポート～食と芸術に触れた8日間～

今回研修は、高松発祥のスーパー「マルナカ」の創業者、故・中山芳彦さんの思いを継ぐ、「中山芳彦香川イタリア交流財団」が地域貢献の一環として、香川県内の高校生20人をイタリアに派遣してくださいました。

研修に参加したきっかけや動機

本場の芸術や人々に触れること、香川県と似た気候のイタリアで食品の加工方法や扱い方を学び、香川県や現在人口が減少している私の通っている高校がある東かがわ市のふるさと納税に生かせるヒントを見つけ街を活性化させたいと思い参加しました。

研修日程（2025.7.24～7.31）

1日目 高松を13:00に出発⇒関西国際空港⇒香港⇒ミラノ・マルペンサ空港着

2日目 ミラノ到着、バルマー移動 パスタ工場見学

世界最大のパスタ工場であるバリラエ場でバリラが広告のデザインにかけた思いや、バリラの歴史、材料の調達方法やパスタができるまでの過程について学ぶことができました

3日目 生ハム工場見学、パルマ大聖堂、ピロッタ宮殿、ガリバルディ広場

私がこの上なく愛する生ハムの製造工程を目の前で見られ、試食までさせていただきとても幸せでした。パルマ大聖堂ではルネッサンス期の画家コレッジョが主に手掛けたフレスコ画に心奪われ特に「聖母被昇天」は言葉が出ないほど壮大で美しい物でした。

4日目 フィレンツェへ移動、その後ウフィツィ美術館、サンタマリアデルフィオーレ大聖堂、ボッテッキオ、シニョーリア広場散策、グラッシナ公民館

教科書で小学生のころから見ていた有名な絵画【ヴィーナスの誕生】やダ・ヴィンチ、ミケランジェロなどの名作をととても近くで見させていただき筆跡や細かな技法が見られて当時本当に有名画家が一つ一つ手作業で描いていたのだと実感が沸きとても興奮しました。グラッシナ公民館のガーデンにて現地の方々と交流。会話をしながらの食事はとても楽しく有意義なものでした。

5日目 トスカーナ地方視察、オリーブ園、トレヴィオ城ワイナリー見学、ミケランジェロ広場その後ミラノへ移動

オリーブ園での気候は香川よりも温度が低く香川よりも少し肌寒く感じました。広大な土地に広がるオリーブは圧巻でした。オリーブの加工方法やワインの製造、保存方法を学びおいしい食事をいただきました。食後には山田吟子さんのオペラを聞くことができとても素敵な日になりました。

6日目 ミラノ大聖堂、オペラ座・ガレリア・イータリーミラノズメラルド（自由散策&昼食）

この日は唯一、自らイタリア語で注文しての昼食でした。りりちゃんとふたりで身振り手振り何とか注文した食事はイタリア中の美食が集まるフードマーケットということでとてもおいしく思い出に残るものとなりました。

7日目 ミラノ・マルペンサ空港へ

8日目 香港⇒関西国際空港⇒高松へ

香港⇒高松の飛行機は遅延があり二時間弱自由時間だったのであやのちゃんと一緒におそろいの豚のキーホルダーを買いました。とてもかわいくてお気に入りです。

振り返り

今回の研修旅行では現地に行かなければ体験できない現地の方との交流や、間近で見た絵画の感動、食へのこだわり、何より私自身イタリア語への興味がわきました。これからも学んでいきたいとおもいました。

また一週間でもとても仲の良い友人ができたことは私の人生にとって大きな財産となりました。

このような機会を作って下さった財団の方々には感謝しかありません。

ありがとうございました。

## イタリア研修旅行

私は、国外旅行に行ったことがありませんでした。いろいろなことが初めてで、これまでにパスポートの取得や、長時間のフライトで機内食を食べたり寝泊りをしたりすることはありませんでした。

さて今回の研修旅行で大まかに3つ、心が充実したものがあります。まず1つ。以前から、イタリアの景色を間近に見たいと思っていました。飛行機がイタリアに降り立とうとしたときに前にもまして高揚感を覚えました。旅の途中で見た山の上の辺りに位置するオリーブ農園の崖からの景色はトスカナ地方の山脈を一望しており、異国というものを形象していました。これが1つ目です。2つ目は、ウフィツィ美術館での見学です。ミケランジェロやダヴィンチなどルネサンス期の名高い画家の作品の原画を間近で観察して、一層芸術観が深まりました。見渡せるヴェッキオ宮殿の古風な建築様式も長い伝統や歴史を感じさせました。3つ目は、教会（ドゥオーモ）です。外から差し込んでくる光とステンドグラスの調和は、幻想的で現地では知ることでできる荘厳さを纏っていました。

食事面。昼食や夕食では、郷土料理であるパスタ、ピザ、ラザニアなどを味わいました。これらは、よく馴染みのある料理で、舌に合いました。あまりにも口に合ったのでここに永住できるのではないかとも思えました。そして、印象に残った食べ物に、生ハム、チーズがあります。イタリアの生ハムは、甘くて溶けるような食感のものが良いとされるようで、幾らか食べ比べをしました。素材の味を楽しむことができました。チーズについては、水分が少なく塩度が高く、燻製したような独特の香りがあるため、デザートより調味料としての意識でした。これについては、慣れない食べ方ではありましたが、美味しいと思いました。

音楽面。オペラ劇場が閉まっていたのは残念に思いますが、今回山田先生の歌声を聴くことができました。道を究めるとこれほどに美しい作品を生み出せられるのかと、心が揺さぶられました。大変うれしく思います。また、大聖堂でミサの最中に思いがけなく居合わせたので、中には入れなかったですが、鐘の音を聴くことが出来ました。非常に厳かな雰囲気でした。しかし、音楽を愛する身としてバロック音楽の祖であるイタリアでもう少し、クラシック音楽に触れられる機会があればよかったのに、と思いました。

気候風土について。イタリアは湿度と気温が低く、外で汗をかくことがありませんでした。これは日本の多湿で暑い夏に比べると大変快適で、避暑地としてしばらく滞在したいと思いました。

国民性について。イタリアは買い物のために店を見て回る時にも、店員とのコミュニケーションが欠かせないと聞いていました。実際に肌で確かめたいと思いましたが、一般的な、スーパーマーケットではさして店員との接点はありませんでした。ただ、距離が近い空間であるレストランでは、店員は積極的に話しかけてきました。挨拶や笑顔を介してこちらから主体的に話しかけて交流できたことは、何にもまして嬉しかったです。

最後に、イタリア研修を通して、県内の他の高校の人々と友達になれて、楽しかったです。そして、一生に一度もない貴重な体験をご用意して下さいましてありがとうございました。この体験をもとに、これからも頑張っていこうと思います。



私は今回、中山芳彦香川イタリア交流財団の派遣事業に参加し、本当に貴重な経験をさせていただきました。初めての海外ということもあり、出発前は不安や緊張もありましたが、現地での体験や人との出会いを通して、自分自身の考え方や価値観が大きく広がり、心から参加してよかったと思える時間になりました。言葉の壁を心配していましたが、現地の人たちは英語やジェスチャーで一生懸命コミュニケーションを取ってくれ、レストランでは「グラツェ！ボーノ！」と笑顔で言うと、「プレーゴ！」と返してくれるなど、人の温かさを感じる瞬間がたくさんありました。

パスタで有名なバリラ工場では、作業のほとんどが機械で管理され、コンピュータによる安全な制御に驚かされました。金属探知機の設置など衛生管理も徹底されていました。生ハム工場では、豚のもも肉を自然の力でじっくり熟成させる工程を見学し、伝統と職人技のすごさを実感しました。特に「スニャトーレ」と呼ばれる最終検査では、馬の骨の針で香りを確かめ、合格したものだけに焼印が押されるという厳しい基準に本物のこだわりを感じました。ワイナリーでは、エクストラバージンオリーブオイルやワインの製造過程を通して、自然と共に生きる農業の姿や、素材・環境にこだわった“ものづくり”の深さに触れることができました。イタリアでは、街ごとに文化や食べ物が異なり、それぞれの地域に個性があることも印象的でした。公民館ではボランティアの方々が心を込めて食事を提供してくださり、地域のつながりの大切さを感じました。

今回の派遣事業で沢山の芸術・食・建築に触れましたが、私がこの派遣事業で最も心を動かされたのは、ミラノ大聖堂の見学です。高校でインテリアコースを選択している私にとって、建築物を見ることは単なる観光以上の意味がありました。ミラノ大聖堂は世界最大級のゴシック建築として知られ、写真では何度も見たことがありましたが、実際にその場に立ち、大聖堂を見上げた瞬間の感動は言葉では表しきれません。繊細な彫刻、色鮮やかなステンドグラス…。そのすべてが、職人たちの想いや技術、そして時間の積み重ねによってつくられた芸術作品であり、「本物の建築」に触れるという意味を深く実感しました。

また、この派遣事業に参加するためには、部活動や学業との両立の中で、作文や面接練習に取り組む必要がありました。簡単なことではありませんでしたが、「行きたい」という強い気持ちを支えに、努力を重ねてきました。派遣が決まったときは本当に嬉しく、「これまで頑張ってきてよかった」と心の底から思えました。帰国後には、家族や友人、先生方にイタリアでの出来事をたくさん話し、それを通して自分自身の学びや感動を再確認することができました。この派遣事業に参加できたことで、私は世界の広さと、自分がまだ知らないことの多さを改めて実感しました。そして「もっと多くの国を見て、学びたい」という気持ちが強くなりました。

このような貴重な機会をいただけたのは、「中山芳彦香川イタリア交流財団」の皆さま、関係者の皆さま、穴吹トラベルの皆さまのおかげです。この体験をただの「思い出」で終わらせるのではなく、これからの進路選択や将来の夢につなげていきたいと思っています。そして、地域のイベントや学校での発表などを通して、自分が感じたことや学んだことを多くの人に伝えていきたいです。より多くの方が海外に興味を持ち、世界に目を向けるきっかけとなれば嬉しいです。

今回のイタリア派遣事業は、私の人生において、かけがえのない宝物となりました。

## イタリア派遣事業について

私は、今回のイタリア派遣事業を通して、イタリアと日本の芸術には大きな違いがあることを具体的に学ぶことができました。その中でも、特にためになった気づきとして大きく二つあります。

一つは、絵画の表現方法についてです。イタリアの絵画は写実的で目の前で感じた印象や事象をストレートに表しています。例えば、ウフィツィ美術館で見た「ヴィーナスの誕生」は、女性の丸みのある柔らかい形の体をリアルに描いており、しなやかな雰囲気の中に堂々とした筆致があり迫力を感じました。日本の美術作品は、浮世絵のようにイラストチックで平面的な表現が多く見られます。イタリアと日本の絵画を比べると、東西における表現技法や歴史の違いを感じられました。

二つ目はデザインの構成についてです。イタリアのポスターやパッケージはシンプルで洗練された中に、日本にはない色使いや構図が思い切り使用されています。具体例を挙げると、初日に訪れたイタリア最大手の食品会社バリラのパスタポスターは、青と赤、黄などの原色を大胆に使用して、商品やモデルがドラマチックに写っていました。そこから、イタリアのデザインは、消費者に伝わりやすくするための工夫を混ぜつつ、インパクトを重視した広告戦法を採っているのではないかと考察しました。

イタリアの自由で柔軟な美術作品やデザインは、私にとって大変興味深いものでした。これまでの私の経験を振り返ると、いつも同じ画風・設計で、固定概念に縛られた制作が続けていたからです。まさに、こうでなければならないという観念のもと、抜け出し方が分からずストレスを抱えていました。しかし、イタリアの解放的な空気の中で過ごすうちに、自分の殻を破りたいという意欲が湧きました。

この経験で学んだことを、早速、実生活で活かせる場面がありました。実は、このイタリア派遣事業のすぐ後に、大学進学のために美術系予備校に通うことになっていました。私は、受験対策のデッサンや色彩構成などでも、不安や受験の合否に囚われ、のびのびと制作できない状況でした。そのような中、イタリアで得たチャレンジ精神を持って、失敗を恐れず、毎日予備校へ通いました。予備校では、これまで警戒して置くことができなかった濃い色をのせたり、多少のミスや無駄なこだわりを気にせず制作に臨みました。結果として、受験対策でこれまでにしなかったことに挑戦して、自分の潜在能力に気づくことができました。今後もさらに、斬新なことに取り組み、自分の可能性を広げていきたいです。

また、他にも意識が変わったことがありました。現地の方々と夕食を交えた交流会が大きなきっかけとなり、海外への留学や移住に関心が生まれたことです。これまでの私は積極的に英語を使い、外国人と話すことがあまりありませんでした。そのため、海外の人と間近で話すことは非常に新鮮なものでした。現地の方と話す中で、自分の伝えたいことが伝わったり、共感したりすることがとても楽しく、徐々に英語で話すことの喜びに気がついていきました。そして、より外国の人やものに触れ、世界の暮らしを学びたいと思いました。自分の進路の選択肢として、海外で活動するということが加わりました。今後はさらに海外に関する情報を収集して、まだ見ぬ世界に踏み出したいです。

今回のイタリア派遣事業に参加できて、数多くの新しい発見や感動がありました。その中で、将来の視野を広げ、新たな道を見つけることもできました。これからもこの派遣事業で過ごした貴重な体験を将来の活動に活かしつつ、多くの人に還元していきます。

私はこのイタリア派遣事業を通して、大きく二つのことを学ぶことができました。

まず一つ目は、イタリアと日本の経済の違いについてです。応募のときの作文には、「実際に現地へ行き、気候や風土が似ているイタリアと日本の経済の違いを、自分の目で確かめて学びに活かしたい」と書きました。正直なところ、行く前の私は「国民性が少し違うくらいで、経済の面ではそこまで大きな差はないのではないか」と思っていました。しかし、実際に街を歩いてみると、その考えはすぐに変わりました。

パルマやフィレンツェなどを訪れたとき、まず目に入ったのは、広場やカフェに集まり、ゆっくりと会話や食事を楽しむ人たちの姿でした。日本でもカフェはありますが、イタリアのカフェは「急いで立ち寄る場所」ではなく、「長く時間を過ごす場所」という雰囲気が強く感じられました。また、高いビルやマンションが少なく、歴史的な建物や石畳の道がそのまま残っている街並みが印象的でした。さらに、どの街にも食品専門のお店が多く、パン屋さん、チーズ専門店、八百屋などが通りごとに並び、店主とお客さんが顔見知りのように挨拶を交わしていました。

応募時の私は、国内総生産やG8での順位など、数字で示される経済の違いばかりに注目していました。でも、実際に現地を歩いてみると、そういった統計やデータでは見えてこない「生活の中にある経済のかたち」がたくさん見つかりました。例えば、日本では大型スーパーでまとめて買い物をすることが多いですが、イタリアでは小さなお店を何軒も回って必要なものをそろえる人が多いそうです。こうした違いは、単なる買い物のスタイルの差ではなく、人々の暮らし方や地域のつながり方にも影響していると感じました。この経験をきっかけに、私はイタリアだけでなく、他の国々についても自分の目と足で確かめてみたいと思うようになりました。商業高校生として、これからも多くの国を訪れ、それぞれの国ならではの経済や文化を吸収していきたいです。

二つ目は、日本とイタリアの国民性の違いです。日本では、決められたルールや時間を守ることが当たり前で、きっちりとした生活リズムを持つ人が多いように感じます。また、必要以上に馴れ合わず、ある程度の距離感を保って接する人が多いとも思います。一方で、イタリアは全体的に自由でのんびりとした雰囲気があり、お店の人やホテルのスタッフなど、初めて会う相手とも自然に雑談ができることが多かったです。人と話すことが大好きな私にとって、このような雰囲気はとても心地よく、滞在中は多くの人と会話を楽しむことができました。特に、グラッシナ公民館で山田先生の生徒さんと交流したときは、笑いが絶えず、時間があっという間に過ぎてしまいました。こうした温かいやり取りは、きっと言葉の壁を越えたコミュニケーションの魅力だと思います。また、イタリアでは「私生活を大事にするために、仕事を早めに切り上げる」という考え方が広く根付いていると聞きました。夕方になると多くのお店が閉まり、人々は家族や友人との時間を過ごします。これはまさにワークライフバランスが取れた生活だと感じました。

もちろん、日本とイタリアで優劣をつけるつもりはありませんが、こうした国民性の違いが街の雰囲気や経済の仕組みにまで影響を与えているのだと思います。私自身、誰とでも気軽に話せるイタリアの雰囲気はとても魅力的で、「また必ず訪れたい」と心から思いました。

今回のイタリア派遣事業では、応募のときに掲げた「日本との経済の違いを知る」という目標を達成できただけでなく、「世界を見て視野を広げる」という新しい目標も叶えることができました。本やインターネットでは得られない、生の経験を通して学んだことは、私にとってかけがえのない財産です。この経験を胸に、これからも新しいことに挑戦し、自分の可能性を広げていきたいと思っています。最後に、このような貴重な機会をくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

「イタリア派遣を通して」

私はイタリア派遣事業に参加し、パルマやフィレンツェ、ミラノなどの都市を訪れました。

『国際』という単語を、単なる言葉として理解するのではなく、人と人が笑顔でつながり、文化を分かち合うことだと肌で感じました。また、文化・歴史・食など、さまざまな面からイタリアの魅力に触れ、普段の生活では得られない多くの学びを得ることができました。

美食の街パルマで訪れたハム工場は印象強いものでした。イタリアの食に対する繊細なこだわりを感じました。イタリアの代表的な食材「プロシュート」の製造現場では、繊細かつ厳格な工程が行われていました。ハムは塩分控えめにすることで、ほんのり甘さを感じる仕上がりになるそうです。2回に分けて冷蔵された後、ひび割れや空気混入を防ぐために「スニャトーレ」と呼ばれるクリームを塗る工程もありました。中でも驚いたのは、最終検査の方法です。DOP認証という厳しい基準に合格するために、専門の検査官が馬の骨で作った鍼を使ってハムに刺し、香りを確認するのです。少しでも異臭がすれば、そのハムは焼却されるとのことでした。品質を守るためにここまでこだわる姿勢に、職人の誇りと食文化の深さを感じました。

また、ワイナリーでは自然を活かした工夫にも感動しました。斜面に建てられた施設は、かつての城塞を改装したもので、家族経営で守られています。昔ながらの木樽で熟成されたワインは、木の素材によって内部のワインが“呼吸”できることで、まろやかで深みのある味わいになると聞きました。発酵の際は空気との接触を避けるため、水で酸素を遮り、気泡が出ることで発酵の様子を確認するという手法も印象的でした。ぶどうを栽培する際も、無農薬にこだわっておられるそうで、植物本来の天然の味を活かしつつ、身体にも害がなく素晴らしいと感じました。

文化面で特に驚いたのは、挨拶をととても大切にしていることです。お店に入る時や出る時には、必ず「ボンジョルノ」や「チャオ」「グラツィエ」といった言葉で店員さんと挨拶を交わします。日本ではあまり見られない習慣だったので、最初は少し驚きましたが、次第にその文化に心地よさを感じるようになりました。また、街中ではとても陽気で親しみやすい人が多く、投げキッスをしてくれたり、「日本人だ」と喜んでくれたりと、人の温かさに触れる場面が多くありました。特に、迷っていたときにトイレの場所を丁寧に教えてくれた現地の人の親切さには、とても心が温まりました。文化や言葉は違っても、人と人との思いやりや交流の力を改めて実感しました。

言葉が通じない場面もありましたが、自分の知っているイタリアの曲「サンタ・ルチア」を歌ったところ、相手の方も一緒に歌ってくださって以心伝心できたことは忘れられない思い出です。また、私がバレエでイタリアの伝統舞踊「タランテラ」を踊った経験を話すと、とても嬉しそうにしてくれました。文化が繋がる瞬間を体感し、言葉以上に強く、人と人を結びつける力があることを実感しました。

この経験を通し、私の視野は以前よりも俄然大きく広がりました。また、私は人と関わることがやっぱり好きなんだと再確認することが出来ました。将来は国や文化の違いを越えて人と人をつなぐ活動に関わっていきたくとさらに強く思うようになりました。最後に、このような貴重な派遣の機会をいただき、本当にありがとうございました。現地での体験や出会い、学びのすべてが、これからの人生において大きな力になると感じています。今回の経験を無駄にせず、これからも学び続け、行動に移していきたいと思っています。



イタリア派遣事業に参加して

今回、イタリア派遣事業に参加し、普段の授業では知ることのできない現地の食文化や伝統の大切さを深く学ぶことができました。中でも特に印象に残ったのは、生ハム工場での話です。生ハムを作る工程の中で、塩を丁寧に塗り込む作業を担当する専門家がいて、その役割を任されるのはたった一人だけだということに驚きました。長年の経験と感覚を頼りに作業を行うため、非常に高い責任感が求められ、失敗は許されません。その緊張感や職人の真剣な姿勢を想像し、重い責任と誇りを感じました。私も趣味でパンを作っていますが、職人の仕事の厳しさやこだわりの深さを改めて実感しました。

さらに、DOP認証を得るためには検査官による厳しい審査を通過しなければならず、不合格の場合はその場で生ハムが廃棄されるという話にも大変驚きました。こうした厳格な基準が、高品質の生ハムを守っているのだとわかりました。また、生ハムには焼印が押され、それが合格の証でありDOP認定を受けていることを示しています。本物である証明のために数量限定で販売されていることを知り、品質管理の徹底ぶりに感心しました。

この事業を通じて、イタリアでは食べ物が単なる生活の一部ではなく、その国の歴史や文化、そして誇りを背負った大切な存在であることを改めて感じました。職人が一つひとつの工程に心を込める姿勢は、私のパン作りにも通じます。材料や手順にこだわることで、作り手の思いが食べる人に伝わるのだということを実感しました。

また、現地での食事の際、自分の力で現地の人とコミュニケーションを取ることができた体験も印象に残っています。つたない英語でも会話ができたことで自信がつき、言語への興味がさらに強くなりました。特に、イタリア語で会話をしている吟子さんの姿を見て「かっこいい」と感じ、私ももっと言語を学びたいという気持ちが芽生えました。

今回の派遣事業を通して学んだのは、異文化を理解するには言語や観光地の知識だけでなく、その国の人々が日々大切にしている生活習慣や仕事への真剣な向き合い方を知ることが重要だということです。この経験をきっかけに、料理や文化を通してイタリアへの理解がさらに深まり、これからも学びを続けていきたいと思っています。

## イタリアで見つけた新しい自分

私がこの派遣事業に応募した理由は二つあります。

一つ目は、小学生の頃からアルトサックスを習っており、音楽が有名なイタリアへ行きたいという憧れを叶えるためです。二つ目は、将来の夢に近づくためです。私は将来、看護師として国内外を問わず医療を届けられる存在になりたいと考えています。そのため、さまざまな国を訪れ、文化や価値観に触れて視野を広げたいと思っていました。海外は初めてではありませんでしたが、ヨーロッパに行くことは初めてでした。飛行機の窓から見えた真っ青な空とイタリアの街並みを見た瞬間、胸の高鳴りは抑えきれませんでした。しかし、現地でまず立ち回らなかったのは、言葉の壁でした。特に忘れられないのは、山田さんが指導していた合唱団の方々と食事をしたことです。笑顔で向けられる言葉の意味が分からず、返事ができないもどかしさは、胸の中にぽっかりと穴が開いたような感覚でした。それでも、身振り手振りや少ない単語を重ね、相手がふっと笑顔を見せてくれた瞬間、「伝わった！」という喜びが体中に広がりました。そのとき歌ってくださった優しい歌声は、今も私の心に響き続けています。また、イタリアでは普通の旅行では味わえない特別な経験を数多くさせてもらいました。生ハム工場、ワイン工場、そしてパスタ工場。中でも、140年以上の歴史を持つBarilla（バリラ）のパスタ工場は圧巻でした。広大な敷地に並ぶ巨大な機械、香ばしい小麦の香り。日本でもおなじみのバリラですが、その始まりが小さなパン屋だったと知り驚きました。シンプルだからこそ、小麦粉選びに徹底してこだわる職人たちの姿に、ものづくりの奥深さを感じました。「バリラあるところに家庭あり」という言葉の通り、イタリアの食卓を支える温かい歴史に触れられたことは、私にとって忘れられない財産です。

この旅で、私の中で一番大きく変わったのは「挑戦する心」です。私はこれまで、言葉が通じない場面では黙り込んでしまうことが多い人間でした。でも、イタリアではなぜか「もっと話したい」「自分から近づきたい」と思えたのです。完璧に話せなくても、相手を思う気持ちは必ず届くと、優しく受け入れてくれるイタリアの人々から学びました。

この経験をきっかけに、私はもっと英語やイタリア語を学び、より多くの人と心を通わせたいと強く思うようになりました。そしてこれからの高校生活でも、外国の方々との交流の機会を自らつくっていきたいです。

最後になりましたが、一緒に旅をした19名の団員は、皆明るく優しい仲間たちでした。そして、中山さん、小西さんをはじめ、この事業を支えてくださった全ての方々に、心から感謝を申し上げます。イタリアで出会った景色、人、そして新しい自分。これらは私の未来を支える宝物になりました。

私は今回のイタリア研修事業に参加し、たくさんの経験をする事が出来ました。その中でも、印象に残っていることの1つは、ミラノの大聖堂に訪れた事です。私は今までキリスト教や、宗教に無知だったため、「大聖堂って何のためにあるんだろう。」「宗教って怖そう。」と偏見をもっていました。しかし、実際に大聖堂を2箇所訪れ、考え方を大きく変えることができました。ミラノの大聖堂に訪れた際、イエス様やマリア様の様々なお話を聞きながら大聖堂内をみてまわるうちに大聖堂は、皆が幸せになりたくてお祈りをしに来る場所でもとても神聖な場所であること、イエス様やマリア様はとても偉大な存在であることを知ることが出来ました。そして、イエス様やマリア様の今までの物語が描かれた美しいステンドグラスを生で見て、言葉にならないほどの衝撃を受けました。テレビや教科書で見るとは違う感動を味わうことができました。今ほど技術の発展していない時代に色彩豊かなステンドグラスを作ることのできる技術にも驚きましたが、そこまでして後世に残そうとした沢山の画家や職人の方たちの気持ちにも感動しました。そして、時間によって光が差し込む位置が変わりイエス様が光り輝く仕掛けになっており、細かな工夫と努力が伝わって来ました。

そして、イタリアに行きイタリアの方たちのフレンドリーに接してくれるところに驚きました。言語の違いがあっても壁を作ることなく接してくれてすごく嬉しい気持ちになりました。お互いの伝えたいことが上手く伝わらなくても翻訳などを使いながら会話をしていくうちに少しずつ理解することができました。分かり合えた時、会話ができる嬉しさを実感することができたうえに、イタリア語や英語スキルを向上させることが出来たと思います。私は将来、警察官を目指しているので、他国の人と会話できるコミュニケーション能力を少しでも身につけられたことは、将来に大きく繋がる良い経験だと思うので良かったと思います。

イタリアに行き、苦労したことも沢山ありました。1番苦戦したのは支払いの時です。日本とイタリアでは使っているお金の種類が違います。ユーロは日本円より細かい金額まであり、ユーロとセントの使い分けにとっても苦労しました。言語が通じない中で誰にも聞くことが出来ず、困った場面もありました。でも友達やガイドさんに聞いたり、相談することで解決させることができました。今回の企画で協調性や仲間の大切さも学ぶことが出来たと思います。1人でも自分勝手に行動すると皆に迷惑をかけてしまうし、仲間がいないと頼ったり相談することもできないということに気づくことが出来たのでこれからの日常生活でも友達や家族を大切にしていきたいと思います。

私は今回の研修で、食文化についての知識を深めたいと思っていました。美食の街と呼ばれているイタリアで今まで食べたことの無い料理や、日本でも食べたことのある料理など様々なものを食べました。その中で日本との違いを発見したり、新しい自分の好みを見つけることが出来ました。ホテルの朝食で生のトマトを食べた際に調理されたあとと前では味が全然違うことに気付きました。皮の硬さや酸味の強さなど日本と違う点も多かったのですが、料理をする前と後でも大きな違いが出ることに驚きました。調理前は皮が固く酸味が強く少し食べずらかった印象でしたが、調理後は酸味もありつつ甘みもあり皮も柔らかかったため、すごく食べやすく日本のトマトと似ている部分もありました。

今回の研修で今まで自分の知らないことや興味があったことについて深めることが出来ました。将来、絶対役に立つと感じました。同じ地球でもここまでの違いがあることにとても驚いたし、イタリア以外の国にも興味が湧きました。これから、色んな国やその国の文化について知っていきたいと思いました。

## イタリアに行って学んだこと

今回の研修旅行で訪れたイタリアで特に印象に残ったフィレンツェとミラノは、私にとって「芸術とは何か」を考える大きなきっかけになりました。写真や映像では何度も見たことがあったけれど、実際にその場に立つと、空気や音、光の色まで含めてまったく別物に感じられました。そしてその体験は、これからの作品制作に生かせるヒントでいっぱいでした。

フィレンツェでは、まず街全体がまるで映画の中にいるようでした。石畳やオレンジ色の屋根、歴史ある建物が途切れなく続いていて、どこを見ても美しい構図になっていました。ウフィツィ美術館で見たルネサンスの絵画は、細やかな描写や光の表現がとても繊細で、人物の息づかいまで感じられるようでした。街に出ると、美術館で見た絵と同じような色が現実の空に、建物に、石の壁に広がっていました。作品はその土地の光や色から生まれるということを、強く実感しました。これから絵を描くときも、色を決めるときにその場の光や空気感をもっと意識してみたいと思いました。

ミラノはフィレンツェとは対照的で、近代的なビルと歴史的な建物が並び、新しさと伝統が混ざり合っていました。ドゥオーモの細かい彫刻は、近くで見ると人間の想像力と根気のすごさを思い知らされます。そのすぐ近くに、ガラス張りのショーウィンドウや最新のファッションがあって、そのギャップが逆に魅力的でした。古いものをそのまま残すだけでなく、新しいものと組み合わせることで、互いの良さを引き出しているように見えました。私も作品を作るとき、古典的な技法や、形をベースにしながら、新しい表現を混ぜることで、自分だけの作品を作れるのではないかと感じました。

イタリアの街を歩いて思ったのは、「完璧に整っていないところにも美しさがある」ということです。石畳の道は少し欠けていたり、壁の塗装がはがれていたりするのに、それがかえって味になっていました。日本だと「直さないといけない」と考えるかもしれませんが、イタリアではそれも歴史の一部として受け入れているように見えました。これからは、自分の作品でも「整いすぎていない表情」や「偶然できた形」をもっと活かしてみたいと思います。

滞在中は、見た景色を少しでも記憶に残そうと、スケッチブックを持ち歩きました。フィレンツェのやわらかい夕暮れや、ミラノのガラスに反射する光を、短い時間でも描きとめることで、色や形の印象がより強く頭に刻まれました。写真では撮れない「その場の空気」を描きながら感じたことは、これからの制作で必ず役立つと思います。

この研修旅行は、単に観光しただけではなく、私の中に「作品を作るための新しい目」を与えてくれました。これからもその目で、日常の中の光や形を見つけていきたいです。そして、イタリアで感じた歴史の深さと新しい発想の両方を、自分らしい作品の中に取り入れていきたいと思います。



この度はイタリア派遣事業に参加させて頂き、本当に良い体験、思い出が出来ました。まず驚いたのが関西国際空港についてからです。高松空港と比べて外国人がとても多く、飲食店や店の数も比にならないくらい沢山ありました。

フライトでは、CAさんに機内食を尋ねられた時にうまく聞き取れませんでした。友達に助けてもらって注文することができました。

香港までのフライトは、ぐっすり眠ることができましたが、イタリアに行くまではあまり眠れず、13時間よりも長く感じました。

無事イタリアにつき、昼食で出てきたラザニアの感動は忘れられません。ラザニアで終わりかと思いきや、そのあとにもう一品、さらにデザートまで出てきてとても驚きました。三日目は朝から生ハム工場に行きました。山の上だったので少し寒かったのを覚えています。生ハムになる前の豚がたくさんつられている光景はとても衝撃的でした。工場見学を終え、生ハムを試食しました。生ハムをグリッシーニに巻きつけて食べました。

本場の生ハムは日本と比べて味に深みがあり、噛んだ時に滑らかにきれえました。

午後は楽しみにしていたパルマ大聖堂にいきました。中に入った瞬間、建物の美しさに魅了されました。ガイドさんの解説をもとに見学するとただ美しいだけでなく、たくさんのストーリーがあったのだなと実感することが出来ました。ピロッタ宮殿では古くからの歴史を感じられました。

フィレンツェのウフィツィ美術館では社会の授業でならった作品を実際に見ることが出来ました。作品に近づいてみることで写真ではわからない、水の模様や草花の細かに描かれているのを見ることが出来ました。

ウフィツィ美術館の窓から見えるフィレンツェ市内と、ポンテヴェキオは色鮮やかでした。

サンタマリアデルフィオーレ大聖堂は白とピンク、薄緑の大理石で造られていて、よく見ると建物のいたるところに銅像があり、引きで見ても近くで見ても美しかったです。

フィレンツェの街はどこをあるいても美しい建物ばかりでした。エアコンの室外機を外においてはいけなかったり、洗濯物を外に干してはいけない、ほかにもこの美しい景観を守るために沢山の規定があることを聞いて驚きました。

ガーデンでの夕食では、地域の方々にイタリア語をおしえてもらったり、イタリアの気候や食文化、香川のことや、私の趣味の話をして盛り上がりました。観光だけではこんなにもコミュニケーションをとることがないのでとても楽しく、交流することが出来ました。ミラノでは大聖堂に行きました。ステンドグラスが美しいと聞いてはいたものの、想像を超える美しさに圧倒されました。ガレリアのなかはゴールドと黒で統一されていてとても高級感がありました。フリータイムではミラノ限定のものなどをたくさん買うことができて、充実した一日になりました。イタリア派遣を通して、異文化を感じたり、日本語が通じない中でコミュニケーションをとる難しさを知ることが出来ました。店員さんに聞こうと思っても、英語が出てこず最終的には翻訳に頼ってしまったことが悔しかったです。イタリアは食も、建物も美術もすべてが素晴らしく、また海外に行きたいと思う旅になりました。

今回学んだことをこれからの生活や将来に生かしたいと思います。充実した一週間を送らせていただき、本当にありがとうございました。とても楽しくいい思い出になりました。

## イタリア研修レポート

私がこのイタリア研修で探求したいと思っていたことは、イタリアの食文化とルネサンス美術である。  
この2つのテーマを主に、8日間のイタリア研修を振り返りたい。

## ① イタリアの食文化

私はイタリア料理が好きである。家でもバリラやディチェコといったイタリアのパスタをよく食べているし、自分でも酵母からピザ生地を作ったりもする。  
なので、美食の街と言われるパルマでの「Barilla」パスタ工場と「SalumificioConti」生ハム工場の視察は大変興味深く発見がたくさんあった。

## “Barillaのパスタの特徴”

高品質のデュラム小麦にたっぷりタンパク質が含まれている。このタンパク質がバリラ独自の製麺、乾燥方法により網目状のグルテンに変化し、でんぶん(うまみ)をしっかりと包み込んでいる。  
また、そのグルテンの網が茹でてもうまみを流出させず、弾力性がパスタのコシを高めている。  
パスタソースだけではなく、麺の食感や香りが大事だという考えは讃岐うどんと共通すると思った。  
お土産で持ち帰ったパスタをいただいたところ、時間が経っても伸びにくく、最後の一口までしっかりとコシがあり美味しい！と実感できた。

## “SalumificioConti 生ハムの特徴”

プロシュート ディー パルマを名乗れるのはこの地域の生ハムのみ！厳格な規制の下で生産、管理され、DOP（原産地保護）の指定を受けていること。  
肉には添加物や保存料は一切加えられず、豚肉＋塩＋海風＋時間が作り出す天然製品である。  
私はスペインに留学経験があり、スペイン産のハモン・イベリコの美味しさに感激し、生ハムが大好きになったのだが（もちろん、どちらも美味しい！）プロシュート ディー パルマとの違いも感じた。  
・スペインの生ハムは食べた後に長く余韻が残る。霜降りが多く、ジューシーな味わい。  
皮を剥いだ状態で塩漬け。  
・イタリアの生ハムは塩味が控えめで、豚肉の本来の甘味が引き出されたまろやかな味わい。  
皮付きのまま塩漬け。  
どちらの生ハムも個性があり、比較することでより違いを楽しめるように思った。

## “イタリア食文化の魅力”

高品質な食材を最大限活かしているところにある。  
こだわりの食材を使うことや素材の味を引き出すシンプルな調理を重視することは、日本の食文化にも通ずるところがあると感じた。

## ② ルネサンス美術

## “ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」”

美術部員でもある私は、フィレンツェのウフィツィ美術館は憧れの場所。  
ルネサンス期の画家、ボッティチェリが残した2つの大作「春」と「ヴィーナスの誕生」を一度に鑑賞できるのだ。  
大きなキャンバスに描かれた「ヴィーナスの誕生」を目の前にし、美しいものを美しいまま描かれていることにとても感動した。  
古典神話が題材の作品を見慣れている現代とは違い、芸術はほとんどキリスト教がテーマであった西洋中世において、このような大きなスケールの古典神話が描かれた作品は前例がなかったことも興味深い。  
また、ルネサンス期の芸術家たちのインスピレーションとなったと言われる歴史深い古都「トスカーナ」ではイタリアの美しい田舎街の魅力も知ることができた。  
トスカーナにはまたいつかゆっくり訪れたいと思う。

## “イタリア研修を終えて”

私の将来の夢はヨーロッパの文化、芸術を日本に伝える仕事をする事！  
このイタリア研修を通じてその思いがより一層強くなった。  
この貴重な経験に感謝しつつ、これからも夢に向かってまっすぐ進んでいきたい。

## 未知の景色

私は、今回のイタリア派遣事業に参加させて頂いて、たくさんの刺激を受け、これまでの自分の考え方や視野が大きく広がったように感じています。実際に現地に訪れたからこそ分かることをまとめていきたいと思います。

私がこの派遣事業に応募した一つの理由として、本場イタリアの生ハムがどのように作られているのかを自分の目で確かめたいと思ったからです。どれだけの工程やこだわりを得て作られているのかを詳しく知りたいと言う思いが強くありました。実際に自分の目でたくさんのことを学び吸収してきました。

イタリアの生ハム工場に足を踏み入れたとき、静かな空気感と独特な香りに包まれ、これがただの工場ではないんだなと実感しました。生ハムが綺麗に吊るされている光景は、まるで芸術作品のように見えました。一つ一つに職人のプライドが込められているんだなと感じました。

中でも印象的だったのは、「塩マスター」という存在です。彼らは、生ハムに塩をすり込む最高責任者であり、その腕次第で商品になるか廃棄になるかが決まるそうです。もし間違った場所にすり込ませたら、臭くなって捨てるしかなくなります。そんな重圧の中で仕事をすると聞き、「才能」と「経験」が何より大切なんだなと強く感じました。工場の中は機械も使われているけど、やっぱり最後は人の手と目がとても重要なんだと思いました。そんな中、特に心を動かされたことが1つあります。それは、DOP制度についてです。これは、一定の基準を満たした製品だけが「パルマ産生ハム」と名乗ることを許されるという制度で、品質や伝統を守るための厳しい審査が行われています。実際に現地で見聞きして、あの美しい生ハムたちが「選ばれた証」を得るために、長い時間と労力、そして職人の技と誇りによって仕上げられていることを知りました。とても繊細で、ほんの少しのミスがすべてを台無しにしてしまうほどの厳しさの中で、それでも伝統を守り続ける姿に、すごく感動しました。説明を受けた際に、審査官が馬の骨でできた道具を生ハムに刺し、香り確かめるという話がありました。そのとき、「なぜ馬の骨なのか？」という疑問が湧き、帰国後に自分で調べてみました。すると、馬の骨は香りを適度に通し、脂を吸わない素材であるため、品質を正確に判断するのに適していることが分かりました。こうして自分の興味から学びを深められたことも、この派遣事業に参加して得られた貴重な経験だと感じています。

今回の経験を通して、食に携わることの責任や奥深さ、そして「本物」を守る人たちの誇りを肌で感じることができました。幼い頃から当たり前のように触れてきた“食”の世界が、どれほど広く、熱い想いに支えられているかを知った今、私の中でその意味が大きく変わった気がします。今後は両親の営む精肉店でも、今回の派遣事業で吸収した知識や視点を活かしながら、ただ受け継ぐのではなく、自分らしい形で“食”と向き合っていきたいです。そして、夢に近づくための一歩として、この経験をこれからも大切にしていきたいです。

最後に、このイタリア派遣事業を主催してくださった中山芳彦様に、心より感謝申し上げます。また、現地で私たちと行動を共にし、たくさんのサポートをしてくださった小西さん、吟子さん、小澤さん、山本さんには感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。そして、この派遣事業を通して出逢えた20人の仲間たちとの日々は、私にとって一生忘れることの無い、大切な思い出になりました。

この貴重な経験と出会いを胸に、これからも自分らしく成長していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

## イタリア派遣事業での学び

僕はこのイタリア視察研修で、工場の見学や、食事や現地の人との交流を通して、文化・芸術に触れ、たくさんのことを学びました。

イタリアでは、レストランに行きました。まず驚いたのは、挨拶の文化です。日本ではお店に入るとき、無言で入ることも少なくありませんが、イタリアでは「ボンジョールノ」と元気よく挨拶しなければマナー違反になってしまいます。店員から何かを受け取るときには「グラツィエ」と言い、店員もすかさず「プレーゴ」と返してくれます。最初は少し恥ずかしさもありましたが、次第に慣れていき、挨拶の大切さと楽しさに気づきました。

コース料理ではラザニアが出てきました。これがとにかく美味しく、後にも先にもこれが一番美味しいイタリア料理でした。サラダにかけるドレッシングがなく、代わりにオリーブオイルとバルサミコ酢をかけて食べる文化にも驚きました。

Barillaの本社にも訪れました。職員の方が工場を案内してくださり、会社の歴史や企業理念について説明を受けて、最後にパスタの製造風景を見学しました。職員の話によると、Barillaは宣伝に力を入れており、世界的に有名なスポーツ選手やオペラ歌手が広告に登場するそうです。ポスターやパッケージも、見る人が好印象を持つように工夫されていると聞きました。

また、Barillaは家族経営で、代々その家族や親族が経営を担ってきたそうです。1900年頃に撮影された社員の集合写真では、家族が並んだ後ろに多数の従業員が写っており、その中で女性の従業員が半数を占めていたのが印象的でした。女性が職場で活躍することが難しかった時代にもかかわらず、多くの女性社員を採用していたことは先進的だと感じました。やはり、固定された価値観にとらわれないことは、企業の成功において重要だと思いました。

生ハム工場では、本場イタリアの生ハムが衝撃でした。日本の塩辛いものとは違って、甘さがありました。工場では、生ハムが作られる工程を実際に見ることができました。ハムの熟成には12ヶ月以上必要で、温度や湿度を細かく調整して最高の味を作り上げることがわかりました。さらにハムを熟成するための塩にもこだわりがあり、塩を見分けるマスターがいるのも興味深かったです。

ウフィツィ美術館では、メディチ家が遺した作品を多く見ることができました。有名なボッティチェッリの作品『春』や『ヴィーナスの誕生』を鑑賞できて感激、ルネサンス時代の絵画や彫刻は、言葉にできないくらい大変感動しました。他にもレオナルド・ダ・ヴィンチの作品には圧倒されました。16歳でありながら、見る角度を計算して描いていたり、18世紀に流行った技法をすでに取り入れていたり、ちょっとよくわからないくらい凄かったです。

美術館ではガイドさんの話を聞くことで、ただ作品を見るだけでなく、その背景や作者の考え方を学ぶことができて、芸術の深さを実感しました。絵画や彫刻がただの「作品」ではなく、現代を生きる僕たちへ、歴史や文化を語る「メッセージ」だと思いました。

イタリアの人々は、どんな仕事にも誇りを持って取り組み、品質や細かい部分にまでこだわりを持っていることがよくわかりました。芸術に対する情熱もとても強くて、日常生活の中でも美を大切にしていることが強く感じられました。

この研修を通して、僕はイタリアの文化、芸術を深く知り、学ぶことができました。この経験を将来の仕事や留学に活かしたいです。

最後に、このような貴重な機会をくださった先生方や関係者の皆さんに心から感謝いたします。本当にありがとうございました。



## イタリアで見た未来像

実感のないまま飛行機を降りると、すでに私はイタリアの地を踏んでいました。石造りの街並み、飛び交うイタリア語、日本より少し肌寒い気候。それらを体感してようやく異国に来たことを意識しました。初めての異国の地で旅への胸の高鳴りの中に少しの不安もありましたが、今回の研修は、私にとって将来の道筋をより鮮明にする、かけがえのない経験となりました。

何より印象的だったのは、土地に根付く宗教観とその芸術的表現を肌で感じられたことです。サンタ・マリア・アッスンタ大聖堂に足を踏み入れた瞬間、ひんやりとした空気感と壁一面に描かれた宗教画や彫刻の荘厳さに身が震えました。特に期待していたパイプオルガンは、少し落ち着いたシックなものが多い日本とは異なり、聖人や聖書の登場人物などの彫刻で装飾されていて、まさに神のために演奏されてきた楽器なんだということが伝わってきました。

フィレンツェでは、なかなか日本では聴くことのできないミサを告げる鐘の音の響きに感動しました。ミラノ大聖堂では、ゴシック建築の壮麗さに息を呑み、内部に差し込むステンドグラスの光に心を奪われました。ちょうどミサが行われており、歌声が聴こえてきました。祈りを捧げる人々は私にはリラックスしているように見え、宗教が人々の拠り所になっているのだと感じました。パルマ国立美術館やウフィツィ美術館でも宗教画を鑑賞する機会がありましたが、その背景や歴史を理解しきれない自分の無知を痛感し、もっと色々な世界を見たいと思いました。

音楽科である自分にとって音楽史に触れる貴重な機会もありました。パルマでは、作曲家ヴェルディの像や彼が作曲したオペラの一節をネオンライトでかたどった通りも見つけました。さらに、ルネサンス期の巨匠モンテヴェルディが、実際に演奏を行ったという歴史あるホールにも足を踏み入れました。現在は「古い音楽」として残っているものですが、その当時「生きていた音楽」だと考えると、深いロマンを感じるものでした。音楽が何世紀にもわたって人々の生活と結びついてきたことを改めて感じました。

パスタや生ハムの工場見学では、その歴史や食文化に触れることで、イタリアンのイメージが変わりました。地元スーパーなどに、様々な種類のパスタなどが並んでいるのを見ると、国民にとってかけがえのない存在であるのだと感じました。

現地での生活や交流を通して、理解を深めるとともに、苦労した部分もありました。イタリアでは、店やレストランに入る時には必ず挨拶を交わします。初めは戸惑いながらも、これが挨拶から会話へと繋がるイタリアのコミュニケーション文化なんだと気づきました。吟子さんの生徒さんたちとの食事会では、食事中に会話を楽しむことが礼儀とされることを知り、互いの文化などについて語り合いました。言葉が通じた時の喜びと、理解できない時の悔しさの両方が、語学をもっと磨きたいという強い思いにつながりました。

最後に、この研修は未来像をより具体的に描くきっかけとなりました。私はヨーロッパで音楽に関わる仕事をしたいという夢を持っています。宗教施設や偉大な作曲家たちの足跡、そして日常の中で自然に芸術が息づく文化に触れ、私が目指す未来の姿がはっきりと見えてきました。同時に、言語力、異文化理解、専門知識など、克服すべき課題も浮かび上がりました。

少し涼しい気候と、明るくおおらかな国民性に励まされながら過ごした日々は、私に多くの学びと自信を与えてくれました。次にイタリアを訪れる時には、今より成長した自分で、堂々とその地を歩んでいきたいと思います。

## イタリア上陸大成功

まず初めに、中山芳彦香川イタリア交流財団様、イタリア派遣事業関係者の皆様に心から感謝の言葉を申し上げます。一生物の財産となる貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

学校でイタリア派遣事業合格を聞いたときから、実際にイタリアへ行って帰ってきた今も夢だったのではないかと思えるほどの経験でした。

行く前にイタリア語を少しだけ勉強したのですが、これは大成功だったと感じています。基本的な挨拶や感謝の言葉を話せるだけで、現地の方との距離は一気に縮まったような気がします。文化の違う方々と交流する時、もちろん英語が大切であることも分かりましたが、それよりも相手の言語を理解しようとする、歩み寄る態度が何より大事だと痛感しました。今後、私が海外に行く時は、挨拶と「ありがとう」それだけでも学んでいくようにしたいと思います。

行く前から、イタリアの社会問題について少し下調べをしていました。調べていると、南北での経済格差や、移民問題が目につきました。確かに、街を歩いていて移民の存在には気が付きました。街の清掃員に有色人種の方がいらっしゃったので、実際目で見て現地で移民の存在を感じることができました。生ハム工場でも有色人種の方が作業をしていらしたり、案内してくださった方のお話では、一番大切な工程を任される塩マイスターもイタリア人ではない、とのことでした。現在の日本でも移民が増えてきており、イタリアの現状は日本の社会にも共通する部分があると感じました。私達が研修で行ったのは北部だったので、南部になるともっと移民の割合が多くなったりするのかなとも思いました。今後は学校での探究活動で、この経験を存分に生かして、学びを深めていきたいです。

移民の件でも学びのあった生ハム工場ですが、視察した中で一番印象に残っている工場でもあります。パルマの生ハムには2つの基準があり、①甘いこと＝塩が少ない、風味があり、健康的である②口の中でとろける味わい だそうです。dopという厳しい基準もあり、検査官が来て馬骨の針を生ハムの5箇所にし、匂いを嗅いでいい匂いだったら合格、その後王冠と企業番号の焼印を押す。不合格なら燃やしてしまうそうです。また、偽生ハムが出ないように数量を決めて管理したりもしているそうです。パルマの生ハム工場は、誇りを持って生ハムを作っていることがよくわかりました。生ハムづくりの肝となる塩を塗り込む塩マイスターは、一つの工場に一人しかいないそうで、厳しい職人の道であることも教わりました。基準を下回るとクビになるそうで、厳しさの理由には生ハムへの誇りとこだわりがあるのだと思いました。試食させていただいた生ハムは、風味豊かでとろけるような美味しさでした。

観光名所で一番心に残ったのは、ミラノのドゥオーモです。行く前から写真を見たことはありましたが、やはり実際に見ると圧倒される美しさでした。大きさも、作り込まれた精巧な美しさにも驚きました。世界最大のゴシック建築で、内部のステンドグラスも圧巻でした。一つ一つ丁寧にキリスト教の絵が作られていて、天気も良かったので光がうまく入りこみ、美しさが際立っていました。

個人的な感想になってしまいましたが、同行してくださった山田吟子さんの歌を聴けて嬉しかったです。建物中に響くような、楽器で奏でたような美しい歌声で感動しました、ありがとうございました！

今回の研修旅行で学び得た経験を、思い出として終わらせず、今後に生かしていきたいと思います。本当にありがとうございました！！

今回のイタリア派遣事業を通して、私は「やってみること」は他のどんなことにも勝る、ということ強く感じました。普段の生活ではあまり意識しないことですが、新しい環境に飛び込んで、言葉も文化も違う人たちと関わる中で、「自分から動くこと」がどれだけ大切かを実感しました。

イタリアに行く前、私は「英語が話せれば、イタリアでも難なく会話できるだろう」と思っていました。実際、観光地などでは英語が通じることも多かったのですが、地方のレストランや地域では英語がまったく通じない場面もありました。そのとき、私はとても焦りました。英語で伝わらないなら、どうすればいいのか。そんなときに頼ったのがGoogle翻訳と、少しだけ覚えたイタリア語、そして伝えたいと思う気持ちでした。

特に印象に残っているのは、オペラ歌手の山田吟子さんに関わりのある、イタリアのお年寄りたちとの交流です。最初は「何を話せばいいんだろう」と不安だったけれど、イタリア語で「こんにちは」や「美味しい」など、ほんの少しの言葉を伝えるだけでも、相手はにこにこしながら聞いてくれました。相手もまた、私たちに英語で話そうとしてくれたり、ゆっくり話してくれたりして、少しずつ気持ちが通じていくのが分かりました。

言葉が通じないという壁はたしかにありましたが、「伝えたい」という気持ちや、笑顔、ジェスチャーがあれば、人は意外と分かり合えるものだということを学びました。日本にただいだけではなかなか味わえない経験だったと思います。

また、今回の派遣では「バリラ」というパスタ会社にも見学に行きました。これは世界で最も大きいパスタ会社ですが、実は家族で始めた会社で、「情熱があれば、どんな夢も実現出来る」という言葉を大切にしているそうです。さらに、バリラでは社員のことを「ただの労働者」ではなく「バリラファミリー」として考えていると聞いて、とても驚きました。日本では、社員を「会社の一部」として見る人が多いように思いますが、バリラのように「一人の人」として大切に考える考え方はとても素敵だと思います。このことを聞いた時に私が以前通っていた塾でも生徒を家族のように扱ってくださっていたことを思い出しました。ただ勉強を教えるだけでなく、今後の人生を生きるにおいて大事なことで教えてくれる場所でした。今はもう通っていませんが、あの塾で得た考え方が今回のバリラでの学びと重なり、改めて自分のいた環境に感謝が湧きました。

もちろん、イタリアの食文化も忘れられません。ピザやスパゲッティはもちろん美味しかったですが、私がいちばん感動したのはジェラートです。旅の中で2、3回食べましたが、どちらも本当に美味しくて、まるで空気みたいに軽くて、甘さもちょうどよくて、「世界一のアイスだ！」と思いました。もしまたイタリアに行けるなら、絶対に何回もジェラートを食べたいです。

あっという間の1週間でしたが、この旅での経験は私の中でとても大きなものになりました。知らない土地で、知らない言葉で、知らない人と関わるのはとても勇気がいることでした。でも、自分から一歩を踏み出すことで、言葉を超えて気持ちが通じたり、今まで知らなかった価値観に触れたり、自分の世界が広がったりしました。

これから先、また同じように迷ったり、ためらったりすることがあると思います。でもそんなときこそ、「まずはやってみること」が一番大切なんだと、この旅が教えてくれました。この経験を忘れずに、これからもいろんなことにチャレンジしていきたいです。

## イタリア研修レポート

今回のイタリア研修では、パルマ、フィレンツェ、ミラノの各都市を巡り、本場の食や芸術、歴史的建造物に触れる中で、イタリア文化への理解を深めることを目的としました。渡航前に書物や映像で抱いていたイメージが、現実の体験を通してどのように変化するのか、期待を胸に臨んだこの旅は、予想を遥かに超える発見と感動に満ちた、非常に有意義な研修となりました。

特に印象的だったのは、食文化の奥深さです。イタリアのパスタは、厳格な伝統的レシピしかないという先入観がありましたが、現地では日本の「混ぜご飯」に近い感覚で、伝統を重んじつつも家庭では様々な具材を自由闊達に楽しむ柔軟性があることに驚きました。もちろん、カルボナーラのような伝統料理のレシピは厳格に守られており、その「守るべき伝統」と「日常の自由な発想」の共存の仕方に、イタリア文化の懐の深さを感じました。また、コーヒー文化も衝撃的でした。日本では主流のドロップコーヒーがほとんど見当たらず、巨大なフードマーケット「イータリー」ですら僅か。人々がバールに立ち寄り、カウンターで一杯のエスプレッソをさっと飲み干して仕事に向かう姿は、彼らにとってコーヒーが単なる嗜好品ではなく、日常のリズムを刻むスイッチのような存在であることを物語っていました。

芸術の面では、フィレンツェのウフィツィ美術館を訪れた際の感動が忘れられません。ボッティチェリやダ・ヴィンチの傑作が並ぶ中、館に入って最初にジョットの荘厳な祭壇画が目飛び込んできた瞬間、美術史の大きな転換点に立ち会っているような感覚に陥りました。それまでの硬質なビザンチン様式から、人間的な感情や立体感を取り戻そうとするルネサンスの夜明けを告げる作品に、時を超えた芸術の力を感じずにはいませんでした。

さらに、街の景観そのものが芸術であり歴史であることに圧倒されました。フィレンツェでは、花の聖母大聖堂（ドゥオーモ）の圧倒的な存在感、ヴェッキオ橋の歴史が刻まれた佇まい、シニョリーア広場の彫刻群が、街全体が屋根のない美術館であることを物語っていました。ミラノへ移動すれば、天に突き刺さるようなドゥオーモの無数の尖塔が織りなすゴシック建築の極致や、世界で最も美しいアーケードと称されるガッレリアの壮麗な装飾に目を奪われます。何気ない路地や広場が数百年の歴史を持つ舞台であり、それらが特別な観光地としてだけでなく、人々の生活の一部として息づいている光景は、歴史と共に生きるということを具体的に示していました。フィレンツェ郊外のトスカーナ地方で訪れたオリーブ園では、なだらかな丘陵に広がる銀緑の葉がルネサンス絵画の背景そのものであり、この土地の風土が芸術と食を分かちがたく育んできたことを実感しました。

この研修で得た最大の収穫は、イタリア文化が博物館に飾られた過去の遺物ではなく、現代に生きる人々の生活の中に脈々と受け継がれている「生きた歴史」であると体感できたことです。この経験は、物事の背景にある文脈や歴史を尊重する姿勢を私に教えてくれました。今後の活動において、表面的な情報だけでなく、その奥にある本質を見極めるための貴重な視点となるでしょう。



「イタリア研修を終えて」

今回の派遣事業は私にとって初の海外渡航であったため、準備の段階から緊張していました。しかし、その分イタリアの空港に着いた瞬間に胸が高鳴ったことを今でも覚えています。どこを歩いても日本人はほとんどおらず、今は自分が現地人の方にとって外国人なのだと思ふ不思議な気分になりました。

まず、バリラの Pasta 工場では会社についてのお話を伺いました。想像を絶するような出来事乗り越えての今があることにも感動しましたが、紹介して下さった CM などの広告にはメッセージ性があり、その全てに心が動かされました。特に印象に残っているのは貧しい家の子供、一般家庭の子、裕福な家の子 3 人が笑顔で Pasta を抱えている広告です。こちらは、バリラの Pasta がどのような人でも幸せに、健康にするとといった意味が込められているそうです。工場見学では Pasta を形成するための金型であるダイスを見ることができ、そのダイスの配置も意外でした。研修中に Pasta を食べることが何度かありましたが、どれもが美味しかったです。

次は、パルマでの出来事についてです。中心部に向かうにつれて日本でも見かけやすいお店が増え、賑やかになっていきましたが、逆に大通りから外れた場所では一転してひっそりしていました。そしてその周辺を散策していると、1 人の老婦人に出会いました。せっかくの機会なのでお店の人だけではなく町に住んでいる人にも挨拶をしようと思い、朝から昼の時間帯でよく使われる「フォンジョルノ」を使いましたが、その時は時刻が夕方近くであったことを忘れていました。すると老婦人の方が「今はボナセーラの方が良いよ」と優しく教えてくださり、まさか指摘していただけたと思っていなかったのが驚きました。このような些細なことではありますが、この日を境にイタリア人のことが好きになりました。

そして、グラッシナ公民館ガーデンでイタリア人の方と交流会を行った際にはジェスチャーの重要性を知りました。また、その日に私と話して下さったイタリア人の方は英語を使わない方だったので翻訳アプリを用いながらでしたが、多くの家族写真を見せていただいたり、自分の所属する剣道部の話をしたりしてとても楽しかったです。しかし、もう少しイタリア語を勉強していたらもっと会話が弾んだのではと後悔もありました。

ミラノ大聖堂ではステンドグラスが幻想的でとても感動しました。事前にネットで画像を見ていましたが実物の方が絵画と錯覚するほどに細部まで綺麗で、さらに日光の当たり具合で雰囲気も変わるので一日中大聖堂を歩きまわりたいと思いました。ギャラリーでは天井だけではなく大陸ごとの絵も描かれていて、全てが豪華でした。そのうえ、大学の卒業生の方がお花で飾られた服装で歩いており、街の人々が祝福の言葉をかけていて非常に素敵な光景でした。

最後になりますが、イタリアは風景や建築物、芸術作品、国民の人間性も含めて綺麗な国です。とはいえ、街中の所々に落書きが目立っていたり、物乞いの方が多かったりしていたのが印象的でした。また、ここに書ききれないことが何個もあるほど今回の研修で多くの経験をすることができました。そして日本の良さも改めて認識することができ、もっと海外に行きたい、世界を知りたいと思うようになりました。加えて、8 日間過ごしていく中で自分と同じような夢を持つ人に出会うことができ嬉しかったです。事業に関わって下さった方、家族、参加メンバーの皆様、ありがとうございました。



## Photo Highlights : Parma





## Photo Highlights : Firenze





## Photo Highlights : Milano





## 帰国後報告会



●2025年9月13日（土）

ホテルパールガーデン1階「玉藻」

出席者：団員12名、団長、当事業関係者4名

式次第：(1)理事長挨拶 中山 明憲

(2)派遣団報告

現地での文化や歴史、人的交流を得て学んだこと等

(3)今後の事業、イベント説明

## “派遣事業後、様々なイベントに参加“



●2025年9月27日（土）

高松丸亀町壱番街前ドーム広場にて  
香川日伊協会様主催【イタリアに乾杯】  
クイズ出題者として参加



●2025年10月2日（木）

レクザムホールにて香川アンバサダー  
山田吟子様の講演  
「Non Solo Opera オペラだけじゃない！  
山田吟子の世界」にご招待いただきました。

# 公益財団法人 中山芳彦香川イタリア交流財団

沿 革 令和6年11月14日 一般財団法人中山芳彦香川イタリア交流財団設立  
令和7年 2月5日 公益財団法人へ移行

設立目的 香川県及びイタリア間の国際交流、文化芸術、農業分野の発展に寄与し、また、国際社会に貢献できる人材の育成を通じて両国相互理解の促進に資することとする。  
本目的に従い、以下の事業を実施する。

- 事業内容
- ① イタリア派遣事業
    - ・ イタリア学生派遣事業  
イタリアに対する興味・関心を高めるため、イタリアへの短期留学を実施し、イタリアに関心を持つ人材の育成を行う。
  - ② イタリアに関する情報収集事業
    - ・ イタリア現地調査  
イタリアの農業や食文化、芸術等についての調査団をイタリアへ派遣し、市場調査や情報収集を行い、その結果を広報誌等で広く周知する。
  - ③ イタリアに関する情報提供事業
    - ・ イタリアに関するフェアの開催  
イタリアの食文化や、国際交流事業についての啓発・普及活動を行う。
    - ・ イタリアに関する講演会の開催  
イタリアにゆかりのある著名人をお招きし、講演会を開催することで、国際交流事業についての啓発を行う。

代表者 公益財団法人 中山芳彦香川イタリア交流財団理事長  
株式会社 マルナカホールディングス取締役社長  
中山 明憲